

前橋市立図書館 令和7年度 企画展示

時代を走り、書き、伝える

—昭和から今を見つめて—

前橋市立図書館 令和7年度 企画展示
時代を走り、書き、伝える
—昭和から今を見つめて—

会期 令和7年8月5日(火)～11月30日(日)
第1期 8月5日(火)～9月23日(火・祝)
第2期 10月7日(火)～11月30日(日)

編集 前橋市立図書館
前橋市大手町二丁目12-9
TEL 027-224-4311
MAIL library@city.maebashi.gunma.jp

企画・展示 松村紗希 吉澤真由 野澤雅子 若井苗

ごあいさつ	… 2
第1章 図書館	
戦後占領期の図書館	… 3
市民のための図書館の実現	… 9
第2章 文学	
無頼派の活躍	… 16
メディアと文学の関係	… 18
群馬県内の動向	… 20
第3章 スポーツ	
悲願の東京オリンピック	… 23
あかぎ国体	… 27
全国障害者スポーツ大会	… 30
キュレーターが思うこと。	… 33
参考文献	… 34

- 『前橋市教育の現況』前橋市教育委員会／編 前橋市教育委員会 1954年
- 『十年の歩み』前橋市教育委員会事務局内『十年の歩み』編集委員会／編 前橋市教育委員会 1962年
- 『群馬県立図書館十年の歩み』群馬県立図書館／編 群馬県立図書館 1964年
- 『市民と図書館を結びつける運営の実際』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1968年
- 『新館建設後の奉仕計画ならびに県都域における県立図書館との関係』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1975年
- 『暮らし〈紙〉』山本和／著 木耳社 1978年
- 『第19回全国身体障害者スポーツ大会報告書』第19回全国身体障害者スポーツ大会群馬県／監修
上毛新聞社グラフ編集室／編 第19回全国身体障害者スポーツ大会群馬県 1984年
- 『前橋市史 第5巻』前橋市史編さん委員会／編 前橋市 1984年
- 『図書館発達史』佐藤政孝／著 みずうみ書房 1986年
- 『前橋市教育史 下巻』前橋市教育史編さん委員会／編 前橋市 1988年
- 『紙の博物誌』渡辺勝二郎／著 出版ニュース社 1992年
- 『日本近代文学年表』小田切進／編 小学館 1993年
- 『群馬県・昭和の文学』根岸謙之助／著 みやま文庫 1994年
- 『ゆうあいピック群馬大会報告書』ゆうあいピック群馬大会実行委員会／編 1995年
- 『時代別日本文学史事典 現代編』時代別日本文学史事典編集委員会／編 東京堂出版 1997年
- 『前橋市立図書館80年小史』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 1997年
- 『20世紀スポーツの肖像』日本スポーツプレス協会／編 学研 2000年
- 『移動図書館「みやま号」50年のあゆみー平成13年ー』群馬県立図書館館外奉仕課／編 群馬県立図書館 2001年
- 『社団法人群馬ペンクラブのあゆみ』『群馬ペンクラブのあゆみ』編集委員会／編 あさを社 2001年
- 『歩み続ける群馬の図書館ー図書館協会創立50周年記念誌ー』群馬県図書館協会創立50周年記念誌編集委員会／編
群馬県図書館協会 2002年
- 『亀倉雄策のデザイン』亀倉雄策／著 六耀社 2005年
- 『近代日本公共図書館年表 1867～2005』奥泉和久／編 日本図書館協会 2009年
- 『荒野の40年』リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー／〔述〕 岩波書店 2009年
- 『図書館用語集 四訂版』日本図書館協会用語委員会／編 日本図書館協会 2013年
- 『図書・図書館史 JLA図書館情報学テキストシリーズIII 11』小黒浩司／編著 日本図書館協会 2013年
- 『現代日本の図書館構想 戦後改革とその展開』今まど子・高山正也／編著 勉誠出版 2013年
- 『映像でみる戦後日本図書館のあゆみ』『映像でみる戦後日本図書館のあゆみ』製作チーム／編 日本図書館協会 2014年
- 『これならわかるオリンピックの歴史Q&A』石出法太／著 大月書店 2016年
- 『前橋市立図書館100年誌』前橋市立図書館／編 前橋市立図書館 2017年
- 『〈東京オリンピック〉の誕生』浜田幸恵／著 吉川弘文館 2018年
- 『図書館の日本史』新藤透／著 勉誠出版 2019年
- 『図書館情報学用語辞典 第5版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会／編 丸善出版 2020年
- 『図書館の日本文化史』高山正也／著 筑摩書房 2022年
- 『昭和史講義 戦後文化篇上』筒井清忠／著 筑摩書房 2022年
- 『昭和史講義 戦後文化篇下』筒井清忠／著 筑摩書房 2022年
- 『坂口安吾大事典』安藤宏ほか／編 勉誠出版 2022年
- 『図書館情報学辞典』日本図書館情報学会／編 丸善株式会社 2023年
- 『平成物故人名録2』日外アソシエーツ株式会社／編 日外アソシエーツ 2024年
- 「湯けむり国スポ・全スポぐんま2029」群馬県 <https://sports.pref.gunma.jp> (最終閲覧日 2025年9月10日)

キュレーターが思うこと。

1985年5月8日、ドイツ連邦議会で旧西ドイツ大統領による演説が行われました。「多くの民族(フォルク)が本日、ヨーロッパの地で第二次世界大戦が終結を迎えたあの日を思い浮かべておりますが、どの民族も、自らの運命に応じ、それぞれ独自の感情をもっております。」という一節から始まるこの演説は、大統領が演説に臨むまでの準備に対する姿勢とその内容が称賛され、後世にも語り継がれています。

長い歴史の中では、何度も思い出したくなるような素晴らしい出来事も、影と反省を伴い、目をそむけたくなるような出来事も起こります。世界中に暮らす人々が、国籍や文化、人種、信仰などのあらゆる違いを超え、たったひとつの地球で手を取り合い、この先の時代を創っていくためには何が必要なのでしょう。

演説は、若い人たちへの願いを託す文章で結ばれます。戦後80年、昭和100年を迎えるこの節目の年に、今を生きる私達も改めて過去を胸に刻み、たくさんの希望(たとえそれが大きくても小さくても)とともにこれからの日々を過ごせることを願っています。

過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります
リヒルト・フォン・ヴァイツゼッカー

ごあいさつ

2025年は第二次世界大戦の終戦から80年、もしも昭和時代が続いていたら100年目にあたる年です。時代の流れの中で人々の生活は豊かになり、様々なテクノロジーが発達したおかげで、世界との距離はぐっと近づきました。時にその量の多さに溺れそうになるほど情報で溢れる現代社会は、遥か遠い国で起こる出来事やその地域に住む人々との繋がりを身近に感じさせる一方で、多くの不安定な要素を抱えています。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と述べたのは、旧西ドイツ大統領・ヴァイツゼッカーでした。彼はこの演説から数年後、東西ドイツを分断していたベルリンの壁が崩壊する瞬間を迎え、統一されたドイツの大統領も務めました。しかし、歴史に刻まれた過去と、多くの反省とともに歩んできたはずの世界には、国境を分かち、民族の行き来を阻む74の分離壁が未だに存在していると2022年の研究で発表されています。

戦後80年、昭和100年を迎えるタイミングで開催する今回の企画展示は、時代を振り返るテーマとして、図書館活動・文学・スポーツの3つを据えました。それぞれの視点を軸に、日本にとっても大きな転換期を迎えることになった時代を辿ります。

私たちがこの先、世界中の人々と手を取り合い、お互いを尊重しながら生きていくために、過去に起きた暗く苦しい出来事への反省を無かったことにするような結末を迎えないために、この展示を通して来場者のみなさまと一緒に考え続けたいと思います。

戦後、GHQによる軍事占領が始まると、日本にアメリカ式の図書館が持ち込まれました。日米双方の協議の上、昭和25(1950)年に制定された「図書館法」で、今後の日本の図書館が目指すべき姿が示されたことと、昭和28(1953)年の群馬県立図書館の開館が、前橋市立図書館のその後のあり方を決定づける出来事となりました。

日本の図書館の転換点としてしばしば指摘されるのが、昭和38(1963)年の『中小都市における公共図書館の運営(通称：中小レポート)』、昭和45(1970)年の『市民の図書館』の刊行です。これを契機に全国で市民に身近な図書館の実現が模索され、前橋市立図書館でも「市民の第二の頭脳」を一つのコンセプトとして、様々な改革が実行されました。

戦後の前橋市立図書館は、これらのターニングポイントを経て現在に至っています。ここでは、前橋市立図書館を中心に、日本の図書館の戦後史をご紹介します。

戦後占領期の図書館

昭和20(1945)年9月、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)による日本の軍事占領が始まると、そのもとに民間情報教育局(CIE)が設置されました。戦後の日本図書館史は、このCIEと密接な関わりを持って始まり、図書館法の制定においてもその影響が及んでいます。図書館法、および昭和28年の群馬県立図書館の誕生は、後の前橋市立図書館にとって大きな出来事となりました。

また、占領期に行われた前橋市立図書館の事業の一部には、県に配置されたアメリカ軍の群馬軍政部が関与していました。

グラフぐんま 201号

群馬県／企画 上毛新聞社 昭和58(1983)年

この号はあかぎ国体の特集号で、秋季大会の開会式や競技の写真などが掲載されています。白熱するプレーの写真のほか、競技を観戦する観客や、ボランティアの写真も多く掲載され、多くの人たちが大会期間中だけでなく準備期間から大会を支えていた様子がわかります。

第83回国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会「湯けむり国スポ・全スポぐんま」が令和11(2029)年に群馬県で開催されることが決定しています。群馬県での国民スポーツ大会はあかぎ国体以来46年ぶりの開催です。

二代目ぐんまちゃん

平成6年開催のゆうあいピック群馬大会のマスコットとして誕生したのが「ゆうまちゃん」です。デザインしたのは当時の県庁職員で、ゆうあいピックの「ゆう」とぐんまの「ま」から「ゆうま」と命名され、帽子の色はゆうあいピックのシンボルマークである月桂樹の色が使われました。

ゆうまちゃんは平成20(2008)年に二代目「ぐんまちゃん」を襲名し、平成24年には群馬県宣伝部長にも就任しています。また、ご当地キャラが集う「ゆるキャラグランプリ」で平成26(2014)年に日本一になり、令和3(2021)年にはアニメ放送も開始されました。

ゆうあいピック

平成6(1994)年に群馬県で開催した全国知的障害者スポーツ大会※10(ゆうあいピック群馬大会)は「いま 君がすばらしい」をスローガンに、県内12会場で競技が行われました。開会式では選手に優しい「群馬方式」が考案され、入場行進は行わずに後方からメインスタンドへの移動にとどめ、式典中は芝生に着席するなど、選手の負担軽減に配慮した独自の運営方法も注目を集めました。この大会では全国から3,691人が参加し、陸上や水泳、バレーボールなど10種目の競技が行われ、スポーツを通じて選手同士だけでなく、関係者や市民とも感動の輪が広がりました。

※10 昭和40年(1965)年から身体に障害のある人々を対象に行われてきた、全国身体障害者スポーツ大会と平成4(1992)年から知的に障害のある人々を対象に行われてきた、全国知的障害者スポーツ大会(ゆうあいピック)を統合し、平成13年から全国障害者スポーツ大会となりました。

グラフぐんま 332号

群馬県／企画 上毛新聞社 平成6(1994)年

ゆうあいピック群馬大会の特集が組まれています。閉会式で大会旗を持って選手の中を進むゆうまちゃんや、後夜祭での八木節カーニバルの写真からは会場の熱気が伝わってきます。

ボランティアの活躍

愛のあかぎ国体、ゆうあいピックは、ともにボランティアの活躍が大きかった大会でもあります。愛のあかぎ国体では、大会のオアシスとして設けられた「友愛の広場」や選手への贈り物の作成、後夜祭などの各分野でも多くのボランティアが活躍しました。また、約150名の大会コンパニオンたちが全員手話を習得し、会場案内や選手の介添えを担当しています。さらに、ゆうあいピックでは式典運営補助・環境美化・選手介助などの活動にかかわった県民ボランティアが予定を大きく上回って13,000人にのぼり、この県民参加方式の運営が障害者に対する理解の形成を大きく後押しし、大会成功へと繋がる大きな力となりました。

図書館法の制定と群馬県立図書館の開館

戦後最初の図書館法規は昭和23(1948)年の「国立国会図書館法」でしたが、これに続いて、公共図書館(公立・私立図書館)に関する法律として昭和25年4月に制定されたのが「図書館法」です。日本側(文部省・図書館関係者)とアメリカ(CIE)側との協議の末、前年に制定された「社会教育法」に基づき、戦後の新しい図書館の定義、運営やサービスのあり方、司書・司書補の制度の確立などを規定しています。図書館法の成立に伴い、戦前の図書館法規※1は完全に廃止されました。

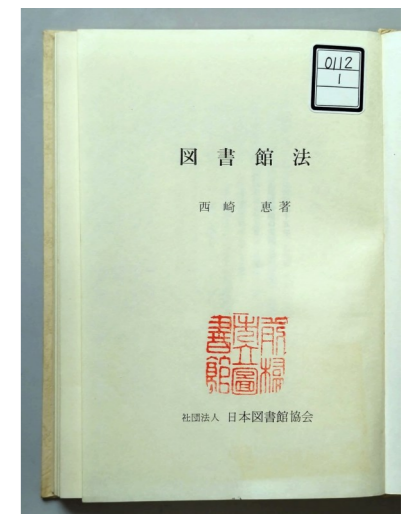
※1 戦前の図書館法規：明治32(1899)年制定の「図書館令」、大正10(1921)年制定の「公立図書館職員令」

図書館法

西崎恵／著 日本図書館協会 昭和45(1970)年

昭和25年の図書館法の制定に携わった、文部省社会教育局長・西崎恵により執筆されました。図書館法の使命・解釈・制定過程等を解説していて、法制定当時の図書館界で広く読まれたといえます。文中では、図書館法に基づく戦後の新しい図書館を、「動く図書館」「働く図書館」と表現しています。

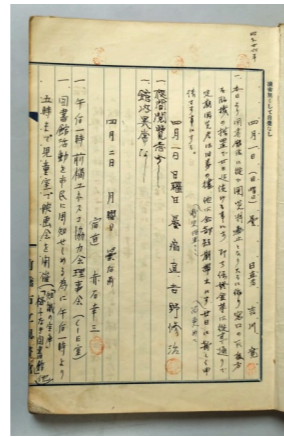
展示の箇所では、戦前・戦後の図書館法規の主な相違点を8つ挙げています。



前橋市立図書館日誌 昭和26年度 昭和26(1951)－昭和27(1952)年

館員による図書館日誌。4月1日には、「本日より図書館法に従ひ閲覧料廃止となりたるに依り」とあります。前年の4月に制定された図書館法は、この日に施行されました。

戦前・戦後の図書館法規の大きな相違点に、公立図書館に無料公開の原則が規定されたことがあります。戦前の図書館令では、閲覧料(入館料等)の徴収を可能とする条文が設けられており、実際に有料の図書館が多数を占めていました。しかし、図書館法ではアメリカ側からその必要性が繰り返し主張されたことなどもあり、無料公開の原則が実現しました。



全国障害者スポーツ大会

全国障害者スポーツ大会は、障害のある人がスポーツを通してその楽しさを体験するとともに、国民の障害に対する理解を深め、障害者の社会参加の推進に寄与することを目的として毎年開催される障害者スポーツの祭典です。毎年国民スポーツ大会終了後に国民スポーツ大会と同じ都道府県で開催されています。

昭和58年に行われたあかぎ国体の後には、第14回全国身体障害者スポーツ大会が開催され、選手と関係者約3,000人が前橋市に集まりました。愛称を「愛のあかぎ国体」、スローガンを「飛び出そう 今ひかりの中に」として、市民の声援の中で熱戦が繰り広げられました。閉会式終了後には後夜祭である「愛あいまつり」が開催され、県庁前交差点から日本銀行前橋支店までを歩行者天国にし、選手と県民約30,000人が集い、歌い、踊り、心のふれあいの場となりました。

上毛新聞

上毛新聞社 平成6(1994)年10月16日

「秋晴れ 友愛の輪」と題して、平成6年10月15日に開幕したゆうあいピックの開会式の様子が掲載されています。選手の体調を考慮した「群馬方式」で入場行進は廃止されましたが、全選手がフィールドにせり出すように移動するとスタンドから割れるような拍手が沸き起こりました。開会式では知的障害者とボランティアによるマスゲーム、楽器演奏、郷土民謡も披露されました。さわやかな秋晴れの下、出場した選手たちは各種目で力いっぱい走り、跳び、泳ぎ、競技を通して固い友情を結びました。補助グラウンドに設けられたふれあい広場には、試合を終えた選手や一般の来場者約17,000人が訪れて大いに賑わいました。

ポスト 第20巻 第10号「国体とひとつになって」 馬場のぼる／文・絵 広済堂出版 昭和58(1983)年

昭和58年開催のあかぎ国体のマスコットである「ぐんまちゃん」をデザインした馬場のぼる(1927-2001)によるまんがルポです。『ポスト』昭和58年10月号に掲載された記事で、あかぎ国体夏季大会の会場の雰囲気とともに、会場近くに設置された郵便局の特別臨時出張所の活気に満ちた様子と郵便局長との会話がユーモアたっぷりに記されています。

広報まえばし 特集号1 前橋市／編 前橋市 昭和58(1983)年

特集号として発行された広報まえばしです。あかぎ国体・愛のあかぎ国体の特集号は1から4号まで発行されています。



初代ぐんまちゃん

初代ぐんまちゃんは「11びきのねこ」シリーズで知られる作家の馬場のぼるによって第38回あかぎ国体のために考案されました。愛称は県内の小・中学生から公募して「ぐんまちゃん」と名付けられた大会マスコットは国体に親しみを与え、歓迎ムードを盛り上げました。ぬいぐるみのほか、ぐんまちゃんがあしらわれたグッズも作成され、PR活動も積極的に行われました。

群馬県立図書館は、昭和21(1946)年に設立された群馬県読書協会の運動により開館が実現しました。当時全国でもわずかであった県立図書館未設置という状況を打開すべく、協会が県と県議会に県立図書館設置の要望を提出したことが契機となり、議論が進みました。結果、館舎の落成前に移動図書館サービスが始まり、昭和26(1951)年12月18日、移動図書館「みやま号」は図書館に恵まれない県内の農山村地域への巡回を開始しました。その後、昭和28年9月12日に群馬県立図書館は開館しています。なお、群馬県読書協会は、昭和20年に廃止された群馬県図書館協会に代わる団体として設立されましたが、昭和27(1952)年に新たな群馬県図書館協会として改組されました。

上毛読書通信 第6号 群馬県読書協会／編・発行 昭和22(1947)年

昭和21年に設立された「群馬県読書協会」の機関紙。この協会は、昭和27年に群馬県図書館協会が設立されるまで、事務局を前橋市立図書館に設置して活動していました。

この号では、県立図書館設置に関する要望を協会として県・県議会に提出したことが報告されています。これを契機に県立図書館設置の機運が高まり、昭和28年9月開館が実現しました。なお、館舎の落成前に移動図書館によるサービスを開始しており、昭和26年12月より移動図書館「みやま号」が巡回を開始しました。



前橋市民大学とCIE図書室

アメリカ進駐軍の群馬軍政部が関与した前橋市立図書館の事業には、「前橋市民大学」と「CIE図書室」があります。

前橋市民大学は、昭和21年9月、前橋市初の社会教育活動の一環として創設されました。戦後、社会情勢や価値観の転換が生じた中、市民の教養向上を目的に、学術講座・講演の開催、会誌の発行等を実施しました。講師は学者や文化人のほか、軍政部のアメリカ人が務めたこともありました。

CIE図書室は、昭和22(1947)年7月、市立図書館内に開室されています。これは、各県の地方軍政部の主導により日本各地に設置されたもので、アメリカの社会・政治の宣伝や民主主義思想の啓蒙などを目的とした英書を揃えた資料室でした。

また、CIE図書室とは別にCIE図書館^{※2}が東京・京都・名古屋・大阪など都市部を中心に23館設立され、県内では高崎と桐生に、東京のCIE図書館の分室が設置されていました。

※2 CIE図書館：CIE Information Center が正式名称。CIE図書室とは別物で、CIE(GHQ/SCAP)を設置母体としていました。当時の日本の大多数の図書館と異なり、無料、開架式(利用者が直接棚から図書を取り出せる方式)書架の採用、文化活動や子ども向けのサービスの実施などを行い、その新鮮さによって日本人に大いに利用されました。

上毛新聞

上毛新聞社 昭和58(1983)年10月16日

あかぎ国体秋季大会では約20,000人の選手が全国から集まり、開会式の会場となった敷島陸上競技場は通路まで観客でぎっしり埋まりました。

開会式前には「上州のまつり」として前橋市内の山車や神輿が多数繰り出し、祭りの熱気を会場に吹き込むとともに、県内の婦人によって上州さわやか音頭などが華やかに披露されました。式典後の「風に向かって走ろうー伸びゆくぐんまー」と題された集団演技では市内の小学生・高校生、県内婦人など約6,000人が参加しました。選手だけでなく、様々な団体が参加した開会式の様子がわかります。

開催決定後は前橋市でも市民総参加の国体を目指して準備が進められ、「すばらしい前橋」のテーマのもと、4つの活動項目を定め、市民活動も推進されました。市民一人ひとりの自主的な参加を目指した活動は、至る所に花が植えられ、街の美化も進められました。これらの市民活動の地道な努力が全国各地から訪れた選手・監督・役員など多くの人から水と緑の豊かなまち、ゴミのない清潔なまち、人情の厚いまちとして絶賛され、大会成功の要因のひとつとなりました。また、多くの選手や関係者が集うため、宿泊が最大の課題として取り組まれ、秋季大会では約800戸の一般家庭と22か所の公民館などの公共施設で選手たちを受け入れました。この民泊受け入れに伴って事前に調理講習会を地区別で複数回行うなど、町をあげて大会を支えました。

群馬県代表の選手たちも県民の期待に応えるように躍動し、男女総合成績408.25点、女子総合成績220.15点という当時の史上最高得点で念願の男女総合優勝と女子総合優勝を果たします。閉会式で天皇杯・皇后杯が群馬県代表の選手に授与されると割れんばかりの拍手が敷島陸上競技場に響き渡りました。

あかぎ国体

昭和58年に第38回国民体育大会^{※8}が群馬県で開催されました。冬季大会と本(夏季・秋季)大会を同一都道府県で開催した大会3度目の完全国体です。あかぎ国体と呼ばれるこの大会は「風に向かって走ろう」をスローガンに掲げ、シンボルマークには上毛三山がデザインされました。

あかぎ国体のシンボルの一つである炬火(きょか)^{※9}は赤城山山頂で「赤城の火」、岩宿遺跡で「岩宿の火」、群馬の森で「群馬の森の火」、相俣発電所で「相俣の火」をそれぞれ採火し、4コースに分かれて県内全市町村をリレーしました。開会式は敷島公園県営陸上競技場で行われ、約20,000人の選手団と集団演技出演者・観客合わせて約70,000人が式典に臨みました、開・閉会式では群馬交響楽団の演奏がおこなわれるなど、健康で文化の香り高い大会と高く評価されました。

※8 国体ともいわれてきた「国民体育大会」の名称は、令和6(2024)年大会から「国民スポーツ大会」に変更されました。国民スポーツ大会は各都道府県の持ちまわりで毎年開催される国内最大級のスポーツの祭典です。「冬季大会」と「本大会」の競技得点の合計を競う都道府県対抗で開催され、男女総合成績第1位の都道府県には天皇杯、女子総合成績1位の都道府県には皇后杯が授与されます。

※9 オリンピックでいう聖火にあたるもの

学燈 第10号 前橋市民大学学友会 昭和23(1948)年



昭和21年9月、前橋市立図書館を事務局として開講された前橋市民大学の機関紙です。

前橋市民大学は、前橋市初の社会教育活動の一環として創設された学術講座で、講師は学者や文化人、さらに県に配属されたアメリカ軍政部所属のアメリカ人が務めたこともありました。昭和29(1954)年度まで定期的に開催されましたが、翌年度より教育委員会が成人学校を開始したため、廃止となりました。

事務日誌 渋谷国忠／著 昭和22(1947)年

昭和22年2月6日より9月26日までの図書館事務について、当時の館長・渋谷国忠が記録した日誌。展示の箇所は、7月16日、CIE図書室開室当日の記事です。CIE図書室は、アメリカ軍政部の主導のもと、英書等を揃えた資料室として全国の図書館に設置されました。

日誌には、当館のCIE図書室が群馬軍政部側からの要望により開室したこと、職員として日本人女性1名が配置されたこと、軍政部の指示により利用者への閲覧票の記入(=入室受付)要求を中止したこと、毎週英語講習会が開催されたことなどが記されています。また、「上毛読書通信」第7号によると、単行本・雑誌約1,300冊が軍政部より交付されたとあります。



市民のための図書館の実現

前橋市立図書館は戦前の図書館法規に基づいて、昭和18(1943)年に群馬県の中央図書館に指定され、県下の図書館・読書団体の中心的役割を果たしていました。しかし、図書館法の制定により中央図書館制度が廃止されたことに加えて、群馬県立図書館の開館もあり、県全体の図書館を支援する機能は県立図書館へと移管されました。これにより前橋市立図書館は再出発の時期を迎え、より市民に密着した、市民のための図書館の実現に向かっていきました。



家庭文庫(バイク)



自動車文庫(ひろせ号)

家庭文庫と自動車文庫

「家庭文庫」と「自動車文庫」は、前橋市立図書館が利用者の来館を待つのではなく、図書館から利用者のもとへ出向いて行ったサービス(館外サービス)です。

家庭文庫は昭和28年より実施され、全国に先駆けた新しい事業として図書館界でも注目を集めました。市街地に居住する利用者の自宅や職場に係員が自転車やバイクで巡回し、直接資料を届ける取り組みで、同市内に開館した県立図書館との差別化を図るため開始されました。

自動車文庫(移動図書館)は、昭和の大合併による市域拡大の際、新市域への読書環境提供を目的として昭和32(1957)年に開始されたサービスで、家庭文庫が旧市域、自動車文庫が新市域を主な対象としていました。各地に駐車所を設けて「ひろせ号」や「いずみ号」が巡回し、「子鹿のバンビ」のメロディーとともに本を届けました。

自動車文庫開設以降、機動力の低さを理由に家庭文庫は徐々に縮小され、昭和43(1968)年に廃止、それを補う形で「いずみ号」の巡回が翌年に始まりました。また、自動車文庫は各地区の分館整備が進んだことから、平成29(2017)年に廃止となりました。

昭和39(1964)年10月10日、アジアで初めての開催となるオリンピックが東京で開幕し、聖火は最終ランナーの坂井義則によって点火されました。彼は広島に原爆が投下された昭和20年8月6日に広島市近郊で生まれた、当時早稲田大学に通う学生でした。晴れ渡った国立競技場上空には航空自衛隊のブルーインパルスが五輪のマークを描きました。

上毛新聞

上毛新聞社 昭和39(1964)年10月11日

昭和39年10月10日に開幕した東京オリンピック一色の朝刊です。1面は最終聖火ランナーによる点火の様子の写真とともに、94の参加国と参加人数が紹介されています。この大会では体操、レスリング、重量挙げ、女子バレーボールなどで10個の金メダルがとれる見込みであることが記事にされています。また、2面から4面までオリンピック関連の記事が続き、5面以降も群馬出身選手の紹介や開会式で演奏した音楽隊のことなど、大小様々なオリンピック関連記事が掲載されています。待ちに待った東京オリンピックの盛り上がりが見て取れる構成です。

大会中特に注目を集めたのは、開会式や新種目となったバレーボールと柔道、マラソンなどで、日本の女子バレーボールは「東洋の魔女」と称され、拾って拾って拾いまくる戦術で宿敵ソ連を破って金メダルを手にしました。ソ連との決勝戦では、テレビの瞬間視聴率は80%に達したともいわれています。

日本代表選手410人が参加したこの東京大会では日本勢が大活躍し、女子バレーボールのほかに、男子体操団体総合やボクシングの桜井孝雄、ウェイトリフティングの三宅義信など、合わせて16個の金メダルを獲得しています。大会期間中は、日本選手の活躍が報道されるたび日本中が興奮に包まれました。スポーツへの熱狂とそこから生み出される感動やドラマは、当時も現在も変わらず人の心を動かし続けています。

オリンピックの代名詞とも言える聖火がギリシャで採火されて沖縄県に入った後、4つのコースで日本中を巡りました。群馬県は第3コースのルートで駆け抜け、県庁到着時は県庁前広場が15,000人で埋まり、人の波をかき分けての県都入りとなりました。また、通過地である前橋市内の沿道には、聖火を一目見ようと20万を超える人たちが詰めかけたといわれています。

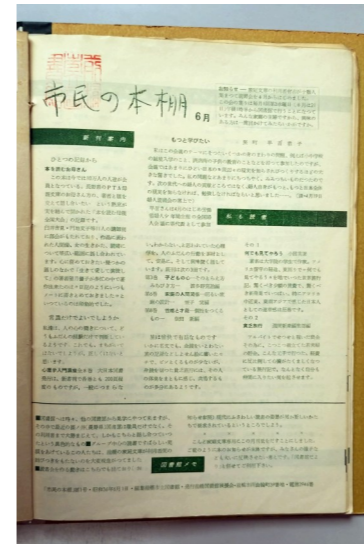
広報まえばし 314号
前橋市／編 前橋市 昭和39(1964)年

聖火は10月4日から3日間群馬県を駆け抜けました。前橋市では10月5日に田口町で北橋村(現・渋川市北橋町)から引き継ぎを受け、6名の正走者(トーチを持つ人)によって県庁へ到着、翌日に県庁を出発し、3名の正走者によって江田町と高崎市との境において高崎市に引き継がれました。聖火は正走者だけでなく、副走者(予備トーチを持つ)2名、随走者(小旗を持つ)20名の計23名を1隊としており、207名で市内約1.2キロずつ9区画を運びました。リレー隊員は市内に住む16歳から20歳までの学校、社会教育団体、スポーツ団体から推薦された青少年で構成されました。

聖火を迎えるにあたり、聖火コースには花が植えられ、その間市内全戸で国旗を掲げて歓迎しようと呼びかけられました。



市民の本棚
前橋市立図書館／編・発行 昭和37(1962)年



家庭文庫のための月刊紙で、図書館だよりとは別に発行されました。新刊案内や文庫利用者の投書などが掲載されています。

家庭文庫は昭和28年に創設されたサービスで、登録した利用者の自宅・職場に係員がバイク等で巡回し、直接資料を届けていました。市内に開館した県立図書館との差別化を図る目的で開始され、市立図書館ならではの、より市民に密着した事業でした。自動車文庫が開設されると徐々に縮小となり、昭和43年に廃止されました。

前橋図書館だより 第24号
前橋市立図書館／編・発行 昭和35(1960)年

当館の図書館だよりは、大正8(1919)年以来発行と休刊を繰り返しています。展示した資料は昭和28年より数年間発行されていました。「自動車文庫利用の姿」として、昭和34(1959)年の利用状況の報告が掲載されています。

自動車文庫(移動図書館)は、昭和の大合併による市域拡大に伴い、新市域への読書環境提供を目的として昭和32年に開始されたサービスです。各地に駐車所を設けて、「ひろせ号」や「いずみ号」が巡回を行い、平成29年に廃止となるまで、市内各所に本を届けました。



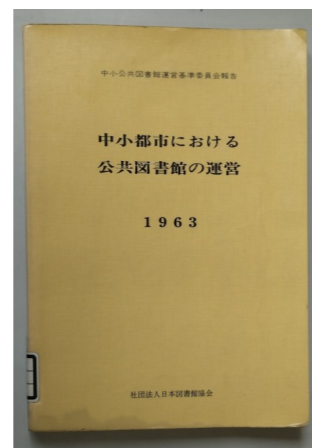
『中小レポート』と『市民の図書館』の影響

『中小都市における公共図書館の運営(通称：中小レポート)』と『市民の図書館』は、日本図書館協会より発行され、以降の日本の図書館界に非常に大きな影響力を持ちました。

昭和38年、まずは『中小レポート』が発行されます。それまでの大図書館(県立図書館等)中心の考え方を否定し、**中小公共図書館こそ公共図書館の全てである**との認識のもと、公共図書館の本質的な機能を「資料を求めるあらゆる人々やグループに対し、効果的にかつ無料で資料を提供するとともに、住民の資料要求を増大させる」ことと位置づけました。中でも、分館の設置や移動図書館の運行といった館外サービスを最重要視し、当時大多数であった自発的に来館しない・できない住民のもとに本を接近させることが図書館の発展のためにも大切であると強調しています。

中小都市における公共図書館の運営 日本図書館協会／編・発行 昭和48(1973)年

人口5～20万人の中小都市における公共図書館運営の基準案として作成されたもので、後の公共図書館界に大きな影響を与えました。ここでは、公共図書館の本質的な機能を「資料を求めるあらゆる人々やグループに対し、効果的にかつ無料で資料を提供するとともに、住民の資料要求を増大させる」ことと位置づけ、「奉仕(=サービス)」を最重要視しています。



東京オリンピックポスター

亀倉雄策／デザイン 昭和36(1961)年－昭和39(1964)年

第18回東京オリンピック公式ポスターは第1号から第4号まで制作され、全てグラフィック・デザイナーの亀倉雄策(1915-1997)がデザインしています。

「思い切って写真で勝負しようと思った」という亀倉の言葉通り、陸上のスタートダッシュをとらえた2号ポスターは選手の写真をメインにしたダイナミックな作品です。亀倉はスタートダッシュのポスターで、望遠レンズを使用して人物が重なり合うように撮ること、1/1,000秒のシャッター動作でピチッと止めることなどを希望し、40枚ほどの写真が出来上がった中から「これはと思ったのはたった1枚だった」と語っています。東京大会以前のオリンピック公式ポスターには写真を使用したものがなかったため、これがオリンピック史上初の写真を使用したポスターです。オリンピックを感じさせる斬新なデザインとして世界的に高く評価されました。

終戦後の物資不足や食糧難という混乱の中、スポーツは明るい話題を提供し、日本の復興を後押ししました。戦後わずか数ヶ月でプロ野球が活動再開、両国国技館では大相撲再開など、日本のスポーツ界も力強く復興への道のりを歩み始めました。

第二次世界大戦後、強兵目的のスポーツが廃止されると国民へのスポーツ振興計画が進められました。昭和21年に第1回国民体育大会が開催され、昭和24年には小学校は体育、中学校から大学までは保健体育が必修科目になりました。そして、昭和39年に開催された第18回東京オリンピックをきっかけに、国民のスポーツへの関心が一気に高まり、「社会体育」（現在の生涯スポーツ）が盛んになりました。また、群馬県内では昭和58(1983)年に国体が開催され、多くの市民の期待と協力のもと大いに盛り上がりました。そこには、オリンピックや国体に出場した選手の努力や情熱だけでなく、それを支え、伝える人たちの強い思いもありました。

ここでは、第18回東京オリンピックとあかぎ国体を中心に、選手だけでなく、大会運営に協力し成功させるために尽力した人たちにも注目します。

悲願の東京オリンピック

日本が初めてオリンピックに参加したのは明治45(1912)年の第5回ストックホルム大会です。その後、昭和15(1940)年の第12回大会の東京開催が決定しましたが、日中戦争の拡大・長期化のため中止を余儀なくされます。戦後、日本とドイツは国際競技団体から除名されていたのでオリンピックへの参加ができませんでしたが、後に復帰が認められ、昭和27年の第15回ヘルシンキ大会に16年ぶりに参加します。

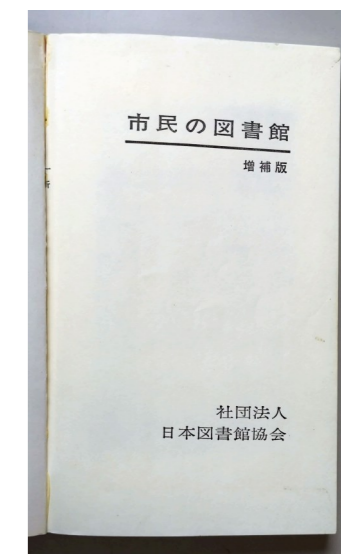
日本でのオリンピック開催の悲願は、高度経済成長期のさなか、第18回東京大会で実現します。大会の数年前からは、開催に向けて日本武道館や代々木の屋内総合競技場などのオリンピック施設の建設・整備が進みました。この時建設された中には、スポーツ関連施設のほか、東海道新幹線や首都高速道路、東京モノレールなどもありました。

『中小レポート』以後、東京都の日野市立図書館が、その理論を実践した図書館として全国的に注目を集めました。『市民の図書館』は、日野市立図書館の事例などをもとに昭和45年に発行され、公共図書館の基本的機能を「資料を求めるあらゆる人々に、資料を提供すること」と位置づけました。国民の知的自由を支える機関・知識と教養を社会的に保証する機関となるために、貸出を最重要視しています。貸出に軸を置いた図書館運営の提案という面では『中小レポート』を引き継いでいますが、『市民の図書館』では個人貸出を、『中小レポート』では団体貸出を前提としています。

市民の図書館

日本図書館協会／編・発行 昭和51(1976)年

『中小レポート』の理論を整理・発展させる形で、公共図書館の運営のあり方について論じています。市立図書館の当面の最重点目標として、「市民の求める図書を自由に気軽に貸出すこと(貸出サービス)」「児童の読書要求にこたえ、徹底して児童にサービスすること(児童サービス)」「あらゆる人々に図書を貸出し、図書館を市民の身近に置くために、全域へサービス網をはりめぐらすこと(全域サービス)」の3点を掲げました。



2つの資料で示された理念の実践は、昭和42(1967)年前後から前橋市立図書館でも取り組まれました。家庭文庫や自動車文庫などすでに実施されていた事業に加えて、この時期には民間委託文庫^{※3}や停本所^{※4}の開設が行われています。また、利用登録手続きの簡素化や入館受付の廃止、書庫の開放、予約・リクエストサービスの開始、雑誌のバックナンバーの貸出なども実現しました。昭和45年には貸出方式を変更したことで利用者・職員ともに手続きにかかる労力が減るとともに、利用者のプライバシー保護も可能になりました。さらに昭和49(1974)年に落成した現在の本館館舎では、70,000冊規模の開架書架が設置されました。

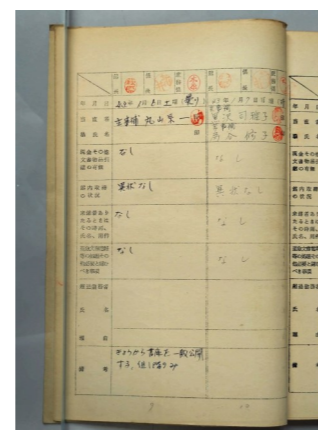
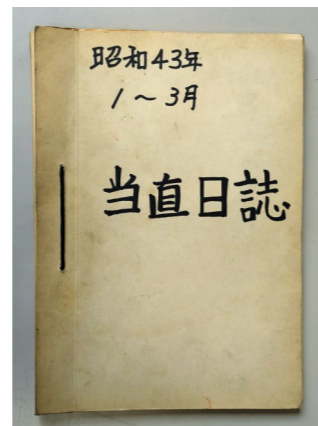
※3 民間委託文庫：個人の自宅の一隅に小さな図書館を設置する活動で、「子ども文庫」として全国的に実施されましたが、前橋では昭和42年11月の「くるみ文庫」が最初です。その後数を増やし、昭和54(1979)年度からは集会施設等を活用した文庫も始まりました。令和7(2025)年3月、最後の「南三文庫」が廃止され、民間委託文庫の活動は終了しました。

※4 停本所：昭和43年以降、地域の身近な図書室として、住民の読書環境整備の目的で設置されました。公民館・児童文化センター・児童館に設置され、公民館の停本所は後に公民館図書室、さらに分館へと発展しています。現在は7ヶ所の停本所が活動しています。

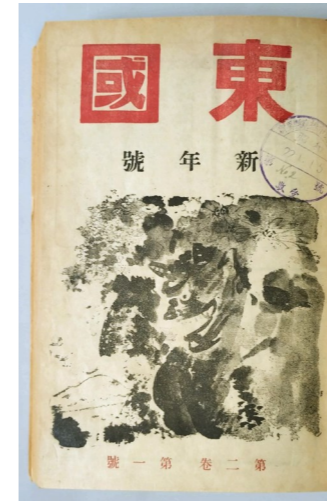
前橋市立図書館日誌 昭和43年1-3月 昭和43(1968)年

『中小レポート』や『市民の図書館』が刊行された頃にあたる昭和40年代は、前橋市立図書館にとって大きな変革期でした。この日誌の1月6日に記載された「書庫の開放」は、一連の改革のひとつです。

昭和43年当時、市立図書館は2代目館舎で運営されており、施設の都合上ほとんどの本が書庫に納められ、利用者は直接本を手にとって選ぶことができませんでした。書庫の一般公開が実現したことによって、利用者は自由に書庫へ入ることができ、一挙に30,000冊が開放される形となりました。



東国 第2巻 第1号 酒井松雄／編 上毛新聞社 昭和22(1947)年



昭和21年に上毛新聞社が発行を開始した総合雑誌です。当時は多くの雑誌が創刊される一方で短命に終わるものも多く、東国も1年で廃刊となりました。展示箇所は、9代目前橋市立図書館長の萩原進が執筆した、群馬県の文学と歴史についての文章です。

戦後に活躍した女性作家たち

女性作家の活躍は、戦後の大きな特徴の一つです。終戦後すぐに、林芙美子、宮本百合子、宇野千代ら、戦前から活動をしていた作家たちが再出発をします。その後、昭和20年代後半の高度経済成長期にはテレビの普及とともにマスコミが拡大し、曾野綾子や有吉佐和子らによる才女ブームが起こります。さらに、マスコミの影響で読者層が拡大し、三浦綾子の『塩狩峠』や山崎豊子の『白い巨塔』など、映像化も相まって多くの人の心に残る作品がうまれます。平成に近づくと、林真理子のエッセイやよしもとばななの短編集などがヒットをはじめ、令和になった現在でも女性作家の活躍は続いています。

また、長崎での自身の被爆体験をもとに多くの作品を執筆した林京子や、水俣病患者に取材を重ねて被害の実態を作品に記した石牟礼道子（いしむれみちこ）など、作品を通して社会に強く訴えかけた作家たちもいます。

さまざまな会が発足、雑誌や機関誌が発行される

戦後の混乱の中、小説、短歌、俳句、詩それぞれの文壇が徐々に息を吹き返し、群馬の文芸復興を目指す動きが各地で起こりました。桐生に疎開していた作家・南川潤が「上毛文芸会」を結成し、昭和21年4月には小説・評論・戯曲・詩・短歌・俳句・音楽芸術の7部門を設けた機関誌『上毛文芸』を創刊します。これが群馬県内の文学活動に刺激を与え、その後も上毛新聞社が発行した『東国』、病院患者によるサークル誌『高原』、群馬県児童文化協会の機関誌『マキバ』など、様々な雑誌が誕生し、文芸団体の数も次第に増加していきました。昭和24(1949)年3月には群馬ペンクラブが誕生し、機関誌『鶴』を発行します。発行にあたり、前橋出身の詩人である高橋元吉が経済的支援を行い、同じく前橋出身の詩人である東宮七男(とうみやかずお)が編集を担当しました。その後、高橋元吉は昭和32年に初代会長にも就任しました。

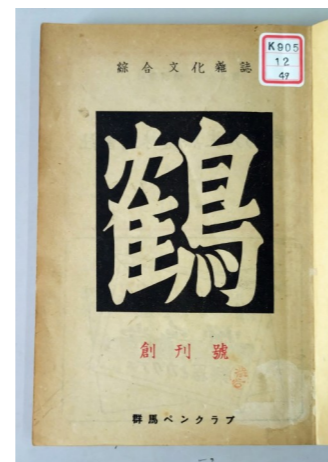
そして昭和38年11月に、「県内文学活動の推進、文学団体の融合親睦と年度内部門別優秀作品の選奨」を目的として、群馬県文学会議が発足します。これに伴い制定された群馬県文学賞は現在も続いています。

鶴 第1巻 第1号

東宮七男／編 群馬ペンクラブ 昭和24(1949)年

群馬ペンクラブの機関誌として、昭和24年4月に発行された総合雑誌です。文学愛好者が自由に意見を交わせる場にしたいという思いから発刊に至りました。発行にあたっては前橋出身の詩人・高橋元吉が経済的な援助を行い、同じく前橋出身の詩人・東宮七男(とうみやかずお)が編集を担当しています。展示箇所は創刊号の目次です。7代目前橋市立図書館長の渋谷国忠による寄稿文のほか、関口雨亭^{※7}や岡田刀水士(とみじ)など、前橋出身の詩人や俳人たちの名前も見受けられます。

※7 関口雨亭：政治家、弁護士、俳人。本名関口志行。第12代前橋市長。



未来の前橋市立図書館

前橋市立図書館は、図書館法の制定と県立図書館の開館、そして『中小レポート』や『市民の図書館』の影響を受けながら発展を遂げてきました。昭和の終わり頃から平成にかけてはコンピュータ導入、令和にかけてはデジタル化が急速に進み、図書館が提供する資料媒体も従来の図書や視聴覚資料に加えて、オンラインデータベースなど、情報化社会の進展とともに多様化しています。

平成に入ると、貸出を最重視する『中小レポート』以後の公共図書館のあり方を見直す動きが起こりました。平成18(2006)年には、これからのあるべき図書館像が「地域を支える情報拠点」「地域や住民に役立つ図書館」^{※5}として示されています。これは、「図書館＝本を貸出する施設」という従来のイメージを払拭するとともに、図書館が地域の発展に貢献し、趣味や娯楽を超えて地域住民の生活に役立つ施設となることを求めたものです。

時代とともに変化してきた前橋市立図書館は現在、再び変革の時期を迎えています。予定されている新本館のビジョンに「対話による多様な学びがある知のひろば」を掲げ、新しい図書館を「創造性を育む場」「市民のリビングとなる場」「地域とともに発展する場」とすることを謳い、新しいスタイルの図書館の実現を目指しています。

※5 「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－」これからの図書館の在り方検討協力者会議(文部科学省)・平成18年



家庭文庫(バイク)

昭和20年8月に終戦を迎えると、それまで息を潜めていた作家たちが一斉に執筆活動を再開し、文学の世界は瞬く間に活気を取り戻しました。一時は紙不足に苦しんだものの、紙の使用制限が解除されると単行本や全集の刊行が盛んになり、空前の出版ブームが到来します。戦中、思うように書物に触れることのできなかつた国民が書店に足を運ぶようになり、新刊の発売日には書店の前に行列ができるほどの読書ブームが巻き起こりました、

この出版・読書ブームは戦後すぐから20年以上続き、さらに誰もが文章で自由に表現することができるようになった影響で、女性作家の活動も目立つようになりました。個性豊かな作家や作品が次々と登場したことで、文学の世界はますます多様化していき、現在へつながっています。

ここでは、戦後の文学の中でも特に無頼派の活躍と、メディアと文学の関係、そして群馬県内での文学活動に注目してご紹介します。

読書世論調査 1958年 第12回 毎日新聞社 昭和34(1959)年

毎日新聞社が実施していた「読書世論調査」の結果をまとめた資料です。この調査は、昭和22年秋に読書週間の催しとして始まり、平成31(2019)年まで毎年続けました。全国の16歳以上の男女を対象にしており、1年間で読んだ良書や最近購入した書籍など、読書に関する様々な項目について調査しています。編集にあたっては、出版業界や図書館、学校などで活用できるように留意されているようです。

群馬県内の動向

土屋文明の影響

戦時中の昭和20年1月に、政府による出版物用紙類の統制強化により、短歌雑誌『アララギ』の発行ができなくなりました。さらに、発行所や会員名簿を空襲で焼失するという困難にみまわれましたが、終戦後すぐに土屋文明が復刊に向けて動き出し、昭和20年9月号を再刊第1号として発行しました。高崎市出身の文明は、当時吾妻郡川戸に疎開しており、交通の便が悪い中、疎開先と東京を往復しながら『アララギ』の再建に尽力しました。また、山陰や九州など各地のアララギ地方会員の歌会にも出席し、直接指導を行うなど、戦後の短歌界の再建に大きく貢献しています。群馬県内でも、文明の指導を直接受けるために吾妻短歌会が結成され、さらに文明を師と仰ぐ斎藤喜博(きはく)が県内のアララギ会員を集めて群馬アララギ会を立ち上げるなど、影響は各地に及びました。

土屋文明書簡集 小市巳世司／編 石川書房 平成13(2001)年

展示箇所は、昭和20年10月に文明が斎藤茂吉^{※6}宛てに送った書簡です。内容からは、終戦直後の『アララギ』の発行の際、紙の確保や印刷所・発行所との契約に苦労した様子がうかがえます。

※6 斎藤茂吉：歌人、精神科医。山形県に生まれる。短歌雑誌『アララギ』の同人で、発行の実務を担当していた。

戦後の紙事情

戦後、日本では言論の自由が保障され、多くの雑誌や新聞が発行されるようになりました。しかし、製紙工場の多くが被害を受けただけでなく、軍需工場に転換していたなどの理由で、工場の数が戦前の半分以下に減少していました。さらに、紙の製造に使われるパルプ供給の約半分を担っていた樺太から資源が確保できなくなったため、紙不足に陥ります。製紙には燃料や電力、資材が必要ですが、復興期にはそれらを重要な産業から先に振り分けたため、製紙業は後回しにされていました。その頃登場したのが、仙花紙と呼ばれる和紙です。仙花紙は、おが屑を固めたような粗悪な紙で、もろくて活字が良く印刷できませんでしたが、紙の使用が統制されていた戦中も和紙はその対象外だったので、大量に生産し使用することができました。

仙花紙はもともと、天正時代に伊予国宇和島の武士が作り始めた高級和紙のことを指し、楮(こうぞ)を2枚漉き合わせた丈夫な厚紙は記録保存用として重宝されていました。時代が進むにつれて、泉貨、仙花、仙過などと名称が変化していき、戦後の粗悪な紙にもこの名称が使われたようです。

無頼派の活躍

終戦直後、谷崎潤一郎、永井荷風、里見淳といったベテラン作家たちの作品が次々と出版され始めます。彼らの作品は、戦争体験を反映させた内容というよりは、戦前の彼らの作風を保ったものでした。そんな中登場したのが太宰治、織田作之助、坂口安吾ら「無頼派」または「新戯作派」と呼ばれる作家たちです。彼らは戦前から作家活動を行い、戦中に発禁処分を受けながらも国策文学に転向せず、作品の姿勢を変えずに厳しい時代を切り抜けてきました。無頼派の作家たちは同じ雑誌や結社などで活動していたわけではありませんが、作品に見られる反権威的な姿勢が共通していたため、同じ派閥として括られるようになりました。また、良家の出身者が多かったことや特定の政党を支持していない人が多かったことも特徴です。

無頼派の中心人物とされている坂口安吾は、『墮落論』のなかで政治や人間に関する自身の考えを主張し、戦後の混乱の中にいる人々に影響を与えました。安吾は昭和27年2月から昭和30(1955)年2月に亡くなるまでの3年間桐生市で暮らし、精力的に執筆活動を続け『桐生通信』や『夜長姫と耳男』などの作品を発表するなど、群馬にゆかりのある作家でもあります。

現代文学大系 53 「墮落論」
筑摩書房 昭和42(1967)年

昭和21年に『新潮』にて発表された、坂口安吾による評論です。戦争に負けたから人間が墮ちるのではなく、ただ人間に戻っただけだという安吾の考えが記されており、戦後の混乱期の日本人に大きな影響を与えました。

安吾と桐生

安吾を語る会 平成28(2016)年

坂口安吾は、昭和27年2月から昭和30年2月までの3年間桐生市に住んでいました。この資料には、安吾が桐生在住中に読売新聞で連載していた「桐生通信」の一部をはじめ、安吾に関する様々なエッセイ、さらに安吾ゆかりの桐生の地を紹介するマップなどが掲載されています。

戦後には、戦争を題材とした文学作品が数多く生まれました。米軍捕虜となりレイテ島収容所に送られた大岡昇平が、その戦争体験をもとに執筆した『野火』、終戦時に故郷である広島県福山市に疎開していた井伏鱒二が、原爆と被爆者の姿を描いた『黒い雨』のほか、戦争が庶民の日常に入りこんでいく様子が描かれた壺井栄(さかえ)の『二十四の瞳』などがあります。無頼派の作家では、太宰治が短編『トカトントン』を発表しています。この作品では、生まれたときから戦争が日常にあった青年が、終戦後、行動を起こそうとするたびに「トカトントン」という金槌の音が聞こえ、何もできなくなる様子が手紙形式で描かれました。内容からは戦後の日常に漂う虚無感が感じられ、闇市や社会運動など、当時の世相がうかがえる場面もあります。

昭和文学全集 5 「トカトントン」 井上靖／編集委員 小学館 昭和61(1986)年

昭和22年に『群像』で発表された、太宰治による短編です。終戦後、恋愛やデモなど何かに熱中しようとする金槌の音の幻聴が聞こえてきて虚無感に襲われてしまうという青年の悩みが、作家宛ての手紙形式で書かれています。この作品は、太宰が実際に受け取った手紙から着想を得て執筆されました。

メディアと文学の関係

戦前の日本には放送法が存在せず、ラジオの周波数や放送の運用は主に軍と政府によって管理されていました。しかし、戦後の占領期に入るとGHQが法を整備し、日本放送協会の民主化に取り組み始めます。テレビやラジオは、紙不足の時代に人々にとっての貴重な情報源でした。昭和27年には、日本テレビ放送網が設立され、NHKと並ぶ唯一の民間放送となりました。設立には朝日新聞、毎日新聞、読売新聞といった大手新聞社が協力し、以降、大手新聞社を母体とするキー局が次々と放送を始めるようになりました。

昭和25年から約10年間で、日本は映画全盛期を迎えます。さらに、昭和35(1960)年頃からテレビが普及し始めたことで、映像化された小説の原作がベストセラーになる現象が起きました。昭和31(1956)年に大ヒットした映画「太陽の季節」は、石原慎太郎の著作で芥川賞受賞作である『太陽の季節』を映画化したもので、著者自身が出演しました。この映画の影響で小説はベストセラーとなり、石原慎太郎の髪形を真似する若者や「太陽族」という言葉が流行しました。

また、昭和51(1976)年には、横溝正史の著作『犬神家の一族』が映画化され、テレビ広告を積極的に活用して大ヒットを記録し、原作小説もベストセラーになりました。映画だけでなく、小説や主題歌のレコードなど、関連するメディアすべてをヒットさせようとするこの手法は、当時の角川書店社長である角川春樹によって考案され「角川商法」と呼ばれます。この商法は『犬神家の一族』を皮切りに、横溝正史の『八つ墓村』、森村誠一の『人間の証明』など数々のヒット作品で展開されました。

年鑑代表シナリオ集 '76 「犬神家の一族」 シナリオ作家協会／編 ダヴィッド社 昭和52(1977)年

昭和51年に公開された映画の脚本集で、10作品が収録されています。展示箇所は「犬神家の一族」の脚本で、シナリオ本文の他にスタッフやキャストの情報も記載されています。